

在日コリアン差別と野球との関わりについて

The discrimination against Korean residents in Japan and baseball

1K04B076 木村 洋平
指導教員 主査 土屋純先生 副査 石井昌幸先生

1章 序章

日韓を代表するスポーツである野球において、多くの優秀な在日コリアン選手が過去、現在問わず活躍している。しかし、彼ら在日コリアンの歴史は差別との戦いであり、常に日本社会の中で疎外され続けてきた。このような社会状況の中で、在日コリアン誕生の歴史や背景を踏まえた上で、在日コリアンはどのような思いや環境の下野球に取り組み、また野球というスポーツが過去いかにして在日コリアン差別の解消に貢献してきたかを文献や新聞記事などを通して、この研究で検証していきたい。

2章 在日コリアン誕生と差別の歴史

在日コリアンの歴史は古く、朝鮮半島から多くの人々が日本に渡るようになるのは、1900年台の初頭である。この時期は日本が朝鮮を植民地化した年代であり、在日コリアン1世の多くは直接的、間接的を含め、日本の植民地政策によって農業を筆頭とする職を奪われ、劣悪な環境で働かせるための労働力として強制連行されるなどの理由で日本へ渡ってきた。そして、在日コリアンは戦争が終結するまでの間、日本の皇民化政策を始めとする政策によって民族意識を剥奪され、また、法的にも差別を受ける存在であった。戦後においても、日本に多くの在日コリアンが留まり、民族弾圧や就職差別など形を変えながら差別を受け、そしてそれらと戦ってきた。法的な差別は時代と共に解消されつつあるものの、日本人による偏見や優越意識といった精神面での見えない差別は根強く残っているのが事実である。

3章 野球と在日コリアン

戦前における在日コリアン一世の野球選手に、早稲田大学にも在籍した金永祚という人物がいる。金は朝鮮が日本の植民地であった時代に、家族と共に日本へ渡り、朝鮮料理の食堂を経営して生活していた。金の自宅は早稲田大学の近くにあり、野球部の練習を間近に見るうちに、野球に憧れを抱き野球を始め、持ち前の運動能力と、勝気な性格もあって朝鮮人であっても多くの日本人と交友し、野球を通して差別を跳ね返した。

戦後になると、1950年代から「在日僑胞野球団」と呼ばれる在日コリアンの高校生で結成されたチームが毎年、韓国へ派遣され韓国の高校生と試合を行うようになる。これによって、在日コリアン選手は自らの民族について強い関心を持つと共に、現地の韓国人にとってはレベルの高い日本野球を吸収する格好の機会であった。結果として、「在日僑胞野球団」は韓国野球の発展だけでなく、韓国人が在日に向ける偏見意識の解消にも貢献することとなった。在日チームに参加した高校生たちは韓国で熱烈な歓迎を受けるものの、言葉の違いや日本との経済格差に戸惑い、韓国人でもない日本人でもない「在日コリアン」としてのアイデンティティを築いていくのであった。

そして、1981年の甲子園大会決勝戦は在日コリアンの選手が両校合わせて7名も出場した。7名中2名のみが朝鮮式の本名で出場しており、戦後35年が経過したこの時期においても、本名を名乗れないという日本社会の状況を示している。

しかし、彼ら7名の活躍は日本全国の在日コリ

アンに勇気を与え、その後、本名を名乗ることを決意した在日コリアンも多くいたのである。高校野球は在日コリアンが日本人と実力で勝負できる数少ない場所であり、在日コリアンにとっては、高校野球は存在を示すことができる場であったのである。

現在においても、韓国人学校が日本の高校野球の予選に出場し始めるなど、在日コリアンとの共生が野球においても進みつつある。

4章 考察

野球によって在日コリアンの存在を示すことで、日本人に存在を認識させる場として、野球はこれまで、大きく貢献してきたといえる。これからは、韓国人学校をはじめとする外国人学校の更なる日本野球への参加ができる環境づくりが課題の一つといえる。そして、これからの時代は「違い」を認め合い共存できる日本を目指す上でも、在日コリアン野球選手たちが「在日コリアン」として野球をする場がより必要である。